

審査の結果の要旨

氏名 福島 秀哉

本研究は、地域の主体性の再構築と、空間計画における協働による、固有性・多様性をもつ空間文化の創出に向けた、社会・空間的な共同体特徴を考慮した計画論構築への基礎的研究に位置づけられる。具体には、近世集落を母体に発展した山梨県南都留郡山中湖村の山中区、平野区、長池区の3区と、3区の母体となった山村である山中村、平野村、長池村の3か村を対象事例とし、集落形成から近代化、高度経済成長期における、村落共同体・生業・集落空間に関する歴史的分析、集落空間の変容に関する地理的分析、領域概念を用いた考察を行い、その社会・空間的な共同体の特徴を明らかにすることを目的とするものである。

第2章では、3か村の村落共同体が、近世を通じて石高制・村請制という制度と各集落環境の条件下で農業生産に加えて複合的な副業・余業に従事しており、比較的生産性が高いものを中心に、その多くが山（入会山、共有地）の資源利用を前提としていたこと、さらに山の資源利用において村落共同体の成員となることが必要不可欠であったことを指摘し、その条件である屋敷地の所有の重要性を近世集落の共同体の特徴として示している。既往の研究成果を援用しながらも、計画論における地域分析の射程を、現在につながる集落形成期である近世にまで広げ、その社会・空間的な共同体の特徴把握の基礎に位置付けたことは特筆すべき点である。

第3章では、明治維新後に中野村の3区となった旧3か村の村落共同体と、新たに誕生した外部計画主体である中野村、山梨県、民間開発事業者である富士山麓鉄道（現富士急行）に着目し、①外部計画主体による集落環境・集落空間の直接的な改変、②集落環境、生業の変化による村落共同体の変化を介した空間改変の、2つの観点から集落空間の変容について分析を行っている。その結果、土地所有制度の変化や、外部計画主体による観光開発と交通網整備による集落空間の変化、養蚕業の発展や観光業への萌芽などの生業の変化は見られるものの、近世にみられた村落共同体と生業、および集落空間の関係の基本的な構造が維持されていたことを示している。富士山麓の近代開発計画の萌芽期について詳細な分析を行うとともに、戦前の対象地における近世的特徴の持続について実証的に示している点が評価される。

第4章では、戦後の広域交通網の変化や急速な観光地化の発展もたらした集落空間の改変、および村落共同体と生業の変化について整理し、山の利用の低下とともに、山における村落共同体内による資源利用や協働の必要性が低くなり、それと関連して生業に関わる共同体の機能が低下したことで、村落共同体と生業、および集落空間の関係の基本的な構造が変化したことを示している。またそれにともない村落共同体と集落空間に関する共同体の特徴としてあげた

屋敷地の所有の重要性が低下したことを指摘している。戦後の集落を取り巻く環境の変化を丁寧に整理するとともに、村落共同体と生業、および集落空間の関係の基本的な構造の変化として、戦後の集落の変化を把握した点が特徴的である。

第5章では、現代の土地登記簿の地番集成図と入手可能な公図により、3区3つの年代の土地利用図を作成し、3区の集落空間の変化について画地レベルで確認することで、字単位で把握していた集落空間の土地利用の特徴およびその変容と、各区における村落共同体の集落空間上の特徴を明らかにしている。対象地域における公図を用いた地理分析に初めて着手するとともに、これまで公図を用いた既往研究ではあまり扱われてこなかった詳細な歴史分析に基づく解釈と、共同体の社会的特徴、特に同族組織に着目した分析を試み、新たな知見を得ている点が評価される。

結章では、第2章から第5章の見解について整理した上で、村落共同体の成員条件としての土地所有に着目した領域形成の概念モデルとして「本拠領域」と「生業領域」を提示し、近世における村落共同体と生業、および集落空間における共同体の特徴であった本拠領域の存在が、生業における山の利用を基本とした関係性によって成立していたこと、戦前までは関係性の構造とともに本拠領域が維持されていたこと、さらに戦後の観光開発、および生活、生業の変化によりその構造が変化し、集落内の居住領域における本拠領域としての意味が失われたこと（旧本拠領域）を示している。また、現代に残る旧本拠領域の空間的特徴として、3区とも総本家（オオオーヤ）を含む多くの屋敷地の画地形態と土地利用が、寺社仏閣、道祖神などの祭神とともに現在の集落空間に内包されて残されていること、現在地域住民が主体となって維持している祭事に関わる民俗的事象の多くが、旧本拠領域と重なっていることを示している。

最後に、対象事例における社会・空間的な共同体の特徴として、山の資源利用を基礎とする「生業に関わる社会的なつながりも含めた屋敷地の所有についての重要性」である本拠領域と、山の利用低下によりその意味が失われた後の、「現代の旧本拠領域における共同体と空間のつながり」を指摘し、その推移の関係性と計画論への展開に向けた枠組みを提示している。

以上概観したように、本研究の最も評価すべき点は、対象地の地域の社会と空間の関係における共同体の特徴の起源を近世に定め、生業と村落共同体、集落空間の関係における領域の変化として、その近代的変容過程を整理し、さらに領域の現代計画論への展開の意義に言及している点にある。また、このような地域研究に対する本研究のアプローチは、地域住民の社会的特徴や、生活空間における空間的特徴を、その歴史の変容過程の把握とともに領域として有機的に結びつけながら計画論への展開を試みる、すなわち実践への強い意志に裏付けられているという点で既往の歴史学や民俗学のアプローチとは一線を画す、きわめて独自性の高い方法論である。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。